

## 音楽を超えてひろがる文化外交 「徳川侯爵交遊録」

というタイトルのもと、いままで高名な音楽家、たとえばブッチーニ、プロコフィエフ、ヴァンサン＝ダンディらと徳川頼貞との交友を紹介してきました。他にもチェロ奏者ホルマン、指揮者ウッド、オルガン奏者ヴィドールなど多くの音楽家とのかかわりを、さまざまなレクチャー等で取りあげてもありますし、カザルス、コルトー、ニキッシュなど…まだまだ交友を語るべき音楽家が残されています。

彼の『舊庭楽話』を一読すれば、その交友範囲が外交、政治、芸術各分野と、たいへん幅広いのに驚かされるでしょう。その一端を、頼貞最後のヨーロッパ滞在から溯って辿ってみましょう。遺稿集『頼貞随想』には、ユネスコ加盟やローマ教皇（法王）謁見、教皇庭園散策などが紹介されています。参議院議員であった頼貞の、国会会期にかからない夏の、彼としては最後となるヨーロッパ滞在は、戦前からの親しい友人との旧交を温める旅でもありました。（美山良夫、本文も）

アームストロング邸  
なかには「日本ルーム」があり、頼貞の写真や寄贈した浮世絵版画のほか、アームストロング家と日本との深い関係を伝える遺品が飾られている。

7/20～8/11  
英国滞在  
イングランド最北部  
クラグサイドの  
アームストロング邸  
に滞在

ウィリアム・ジョン・モンタギュー・ワトソン＝アームストロング男爵 (1892-1972)  
アームストロング家の遺産を継承。軍人や外交官として活動した。

6/11～7/20  
フランス滞在

6/18～7/11  
ユネスコ総会に出席、日本の加盟承認に尽力  
パリ16区パシーのド・ビイ邸に滞在  
ピアニストのコルトーと再会

ロベール・ド・ビイ伯爵 (1869-1953)  
フランスの外交官。ドイツ、英国（ロンドン）、モロッコ等で勤務のち、ポール・クローデルの後任として駐日フランス大使（1927-29）。

マジェスティック・ホテル（パリ）  
1958年までユネスコ本部が置かれていた。頼貞はド・ビイ邸からユネスコ総会に通った。

6/9  
第6回ユネスコ総会（パリ）  
出席のため羽田空港から渡仏

8月中旬 ブリュッセルの  
バッソンビエール邸に滞在

アルベール・ド・バッソンビエール男爵 (1873-1956)  
1939年まで18年間にわたり初代駐日ベルギー大使をつとめ、帰国後『回想録』を著した。

8月下旬  
ローマに滞在  
旧友エンリコ・サン・マルティーノ伯爵は4年前に逝去していた。

8/30  
ローマ教皇の庭園を散策し空路帰国

### 1951年のヨーロッパ訪問



# 伯爵 ロベール・ド・ビイ

Robert de Billy  
(1869-1953)

1869年6月27日パリで厳格な改革派プロテスタントの家庭に生まれる。サン・ルイ校、普仏戦争を踏まえて設立された政治学自由学院に学ぶ。兵役。外務省入省、外交官の道へ。ベルリン、サンクトペテルブルク等に赴任。1896~1899年、ロンドンでフランス大使館二等書記官。1906年、モロッコ勤務後アルヘシラス会議におけるフランス代表団の首席秘書官。その後ローマのフランス大使館一等書記官。1917~1926年、駐ギリシア大使等を歴任。1927~1929年、駐日大使（ポール・クローデルの後任）。1953年5月26日パリで死去、パッシー墓地に埋葬。



ド・ビイが残した書類、書簡等はフランスの外交文書館にまとめて残されており、そのなかには「日本について知らねばならないこと」等の日本関連の著述が含まれている。在日中に京都九条山に関西日仏学館が開館（1927年10月）、建物の落成式や翌1928年の特別講演のたびに京都訪問。彼の講演「中世紀以来の書物の挿絵」は読売新聞に連載された。同年、ヴァイオリン奏者ジャック・ティボー来日に際し、紹介文を寄稿、翌年にはパリの日本美術展開催に尽力、帰国後も在仏の銅版画家、長谷川潔（1891-1980）とともに、『新しい日本版画とその起源』（パリ装飾美術館展覧会図録、1934年）に寄稿するなど、日仏の文化交流に尽力した。

——私はパリ滞在中、元駐日大使であった知人宅に泊まったが、夕食が済んで、主人夫妻と共にテラスで食事の後のコーヒーを飲みながら歓談に耽っていると、下僕が我々の存在を無視して、テラスに向いている戸を平気で閉めて了うのである。つまりわれわれは締め出しを食うわけであるが、老夫妻は一向平気で、時間が来ると80歳に近いにもかかわらず、自分の椅子を肩にし庭を横切って玄関から家の中に入っていくのである。私も彼に従って同じようにしたが、どうも得心が行かないので彼に尋ねてみた。「相手は下僕ではありませんか。我々が部屋に入るまで、戸を閉めるのを待たせたら良いでしょう」

すると老主人は静かに答えるのであった。「それは古い考え方だ。昔のことである。今日パリでは8時間労働制が励行され、時間になると使用人は帰ってしまう。しかし、それで一向差し支えないではないか」

もし日本であったらどうだろう。私は老主人のこだわらぬ話を聞き、ここにデモクラシーの精神が生かされていると感じた。

徳川頼貞「欧羅巴の印象—ユネスコ総会に出席して—」

## パリのド・ビイ邸

1951年に徳川頼貞が滞在した邸宅は、東にセーヌ川が流れ、西にはブローニュの森が控える小高い住宅地域パッシーにあった。その「豪華な大邸宅」を日本駐在のため出発する直前の1927年2月23日に訪問した朝日新聞のパリ特派員は、ド・ビイが桜の時期に日本に着任できる喜びを語ったとし、彼の人柄を伝えている。

——大使は大きな身体をもっているが、流石に貴族のこととて気品をそなえ、礼譲に富んだ人好きの良い外交官

で（中略）、また古美術品愛好家でその広い応接間には幾多の骨董品が見事に陳列されているが、大使は特に日本屏風の前に余を導き、300年前の逸品だから——と得意がっていた。そこで特派員は大使の着任後に（朝日新聞の）村山社長のコレクションをお見せしようと応じたという。（同年2月25日付け同紙朝刊記事より）

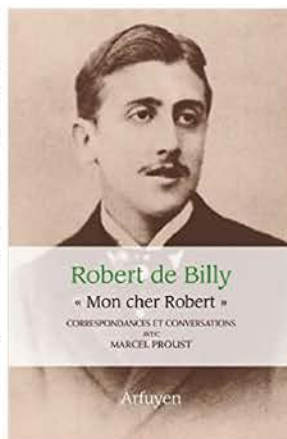
## マルセル・プルーストとド・ビイ

1890年、オルレアン。フランス中部、ジャンヌ・ダルクゆかりの地で2人は知り合った。『失われた時を求めて』を書くことになる若者は、歩兵連隊で志願兵役につき、ド・ビイは砲兵連隊に所属していた。同年2月、彼らは県知事の招待を受け、やがてともに自由政治学院にいたことに気づく。以後プルーストは、厳格なプロテスタントで、山を好み、古い美術に通じた2歳年上の伯爵との交友をつづけ、自らのサークルやサロンに誘った。

ロンドン駐在中にド・ビイは英文学を深耕、ラスキンの著作をプルーストに送るや、彼はその翻訳に乗り出す。1901年と翌年に二人は友人を誘って、ノルマンディーなどフランス北西部の大聖堂を巡る旅をした。

プルーストは生涯を通じて、ド・ビイのもつ深く豊かな教養、率直さ、正義感を敬い、心の内を、葛藤を明かすたくさんの手紙を、国外に赴任している彼に宛てて書き、ド・ビイもそれに応えた。プルーストは、いつの日か回想を書くようにと彼に述べたという。生来謙虚なド・ビイがそれに応じることはなかった。だが、日本での任務を終えてパッシーの自宅に戻ってまもない1930年、8年前に世を去った友人が、実はモンテーニュに比すべき存在との思いから、プルーストとの往復書簡と

会話を纏めあげていた。今春、『親愛なロベール様』と題され再刊された。本年11月18日、プルースト没後100年を迎える。



ロベール・ド・ビイ  
「親愛なロベール様—マルセル・プルーストとの往復書簡と会話—」(2022)



自身の最後となるヨーロッパ滞在中を終えた徳川頼貞は、主務であったユネスコ加盟のための総会参加や旧交を温めた際の感想、見聞した音楽について、小文をいくつもの雑誌に寄稿している。そのうち、ユネスコ加盟やローマ教皇との謁見については、死後出版された『頼貞随想』に収録されている。ここに再録したのは、自由党機関誌「再建」第5巻10号（1951年12月1日発行）34~38ページに掲載された「欧羅巴の印象—ユネスコ総会に出席して—」の一部である。

頼貞は、音楽にかかわる交友ではないためか、ド・ビイとアームストロングについて、『善庭楽話』で触れることはなかった。戦後の、ともに爵位をもった旧友たちの生き様に、自らを重ねたのであろうか、ユネスコ総会に言及する前に、紙幅の半分を割いて印象を述べている。



# 男爵 ウィリアム・ジョン・モンタギュー・ワトソン＝アームストロング

William John Montagu Watson-Armstrong  
(1892-1972)

1892年10月10日生まれる。1903年、大祖父の遺産を相続した父が男爵となる。1914年、トリニティ・カレッジ（ケンブリッジ）で歴史学の学位を得る。兵役（1913-1917）。1915年、大戦中、ベルギーの第2次イープル会戦で重傷。1918-1919年、インドで軍務。日本、アメリカ経由で帰国。1924年、カナダに移り、外交官として駐シャム（タイ）王国領事に。1929-1942年、総領事になり1932年の立憲革命で



photo: National Portrait Gallery, London

は新政権を支持。1942-1946年、ブリティッシュコロンビア州とユーコン準州の駐オランダ領事。1946年、引退し帰国。クラグサイドとバンブル城で過ごす。1972年7月6日、79歳で没。

おそらく1914年、共にケンブリッジで学んでいる時にアームストロングと徳川頼貞は知り合った。1919年4月、インドにおける任務を終え、アメリカ経由で帰国する際、家族の待つ東京に着き、約5週間観光目的で滞在した。大磯の徳川別邸に滞在したのはこの時であろう。10年後、頼貞夫妻はクラグサイドのアームストロング邸を訪問した。クラグサイドに残された浮世絵などの贈り物は、この機会に持参されたと思われる。1941年、父の死により襲爵しアームストロング男爵2世となった。

——私は英国滞在中、スコットランド近くに居住するアームストロング男爵の居城に3週間厄介になった。

随分昔のことであるが同男爵が日本に来た際、大磯にある私の別宅に泊まったことがある。私の別宅からは海を隔てて江の島が手に取るように見渡せるが、男爵はその江の島を指して「徳川君、あの島も君の庭の一部かね」と真顔で尋ねたものである。「いや庭はここだけだ」と答えたら「狭いではないか」と妙な顔をしていた。元は冗談に言っているのかと思ったが、そうでもないらしい。とすれば、男爵は少々気が変ではないかとずっと考えていたが、その後私が英国に行き男爵の居城（まさに日本のお城以上である）を訪れに及んで、男爵の先の質問が少しも不自然でなかったことを初めて了解したのである。

男爵の居城は土地が5万エーカー（約18万坪）で、城内には森も川もあると言う広大な邸宅である。かつては数十人の使用人を使って一度に多数の客をすることもできた。江の島が庭の中にあっても決して不思議ではない。このお邸を今回訪問したのであるが、何もかも20年前とは大違いで、非常に驚いてしまった。私が訪れると男爵夫人がただひとりポツ然として私を迎えた。そして「徳川さん、荷物はご自分で持ってお入りください」と言うのである。後でわかったのであるが使用人が誰ひとりもないのであった。

そこで私は男爵に「一体これだけ広大な邸をどうして維持するのか」と尋ねたところ、「いや普通では維持することはできない。だから屋敷を公開して、その入場料を維持費に当てている」とのことであった。

徳川頼貞「欧羅巴の印象—ユネスコ総会に出席して—」

## クラグサイド（アームストロング邸）

1951年に徳川頼貞が滞在した邸宅クラグサイドは、イングランド最北東部、スコットランドに接するノーサンバーランドにあるヴィクトリア朝のカントリー・ハウス。大祖父ウィリアム・アームストロングが建築家リチャード・ノーマン・ショウに依頼。チューダー・リヴァイヴァル様式の建物が1869～1982年にかけて築かれ、北方のノイシュバンシュタイン城とも称された。

photo: Cragside National Trust

アームストロング夫妻と徳川夫妻(1929)



photo: Cragside National Trust



◀「日本ルーム」  
右側の壁に浮世絵が、中央・左側の家具調度には頼貞の写真が置かれている。

ギャラリーをはじめとして館内はアート・コレクションで満たされ、彼の会社との関係をもとめる世界の要人たちがゲストとして訪問、滞在した。日本の実業家、のちに首相になる政治家、軍人も含まれている。

大祖父の相続人は、この遺産の維持に苦労を重ねた。頼貞の友人W.J.M.W=アームストロングが1972年に亡くなると売却の計画も持ち上がったが、1977年にボランティア団体のナショナル・トラストが一大キャンペーンをおこない建物と敷地を買い取った。2007年一般公開。修復は今も続いている。日本との繋がりの記憶をとどめる「日本ルーム」があり、その中央に、署名の入った頼貞夫妻の写真が飾られている。

## アームストロング社と日本

弁護士から技術者に転身したウィリアム・アームストロングが設立した会社アームストロング社は、クレーン等の動力機械を生産していたが、クリミア戦争（1853-56）を機に軍需産業に関わり、画期的なアームストロング砲を開発した。1864年に合併新会社を興すと軍艦の建造をすすめた。日本海軍は、英国に次いで第2位の顧客であり、日本海海戦ではアームストロング・ホイットワース社の造船所で進水した艦船が勝利に貢献した。1921年、ときの皇太子（のちの昭和天皇）のヨーロッパ訪問では、英国で建造された戦艦がお召艦、随艦とされ、5月25日にはアームストロング社視察も含まれていた。



# 男爵 アルベール・ド・ バッソンピエール Albert de Bassompierre (1873-1956)

1873年8月3日ブリュッセルで生まれる。バッソンピエール家はリエージュで書店を営んでいたが、ベルギー独立（1830年）ごろから多くの外交官を輩出していた。永世中立国の外務省に入省し、第一次大戦中ドイツ軍の侵攻による全土荒廃を体験。1920年12月26日、在日ベルギー公使に任用され、翌年5月11日東京の公使館（旧大久保利通邸）着任。1922年6月、特命全権大使に昇進。1928年春、麹町二番町の故加



藤高明伯爵邸を大使館として購入。同年12月、駐日ドイツ大使ゾルフ博士の離任にともない駐日外交団長に就任。1929年10月30日、アルベール一世から男爵を授爵。1939年2月16日、離任し帰国の途へ。

日本文化に通じ、離任にあたって帰国後は日本研究を続けたいとの意向を洩らしていた。ピアノ演奏を能くする夫人とともに音楽に精通、またテニスを通じて都内や軽井沢で交友の輪を広げた。フランス大使であったポール・クローデル家と親しく、両家の夫人主催で慈善演奏会を催しもした。愛娘は日本舞踊を習い、披露してもいる。

バッソンピエールは、パリで刊行されていた『両世界評論』誌1916年2月号に、『1914年8月2日から3日の夜、ベルギー外務省で』を寄稿、国内を通りたいというドイツ軍の要求をベルギーが拒否する夜の緊迫した外交を綴った。同年中に単行本とその独・英訳版が刊行された。離日後、『在日十八年 バッソンピエール大使回想録』（仏語、1945年）を書き、その邦訳（1971年）は『ベルギー大使が見た戦前日本』と改題のうえ2016年に再刊されている。このほか、ベルギーとの友好に尽力した皇族・海軍軍人の東伏見宮依仁（1867-1922）の業績を纏めた『依仁親王』（1927年、私家版）に追悼文を寄せている。

——1927年4月、私は妻と下の子供ふたりと一緒に、大阪の南にある和歌山の徳川（頼貞）侯爵の邸に滞在した。古い日本様式の城が、今なお町に君臨している。この城は、現在は博物館にかわり、その周囲の庭は公園になっている。私たちを迎えてくれた徳川侯爵はいたるところで、今なおその地方の有力者たちによって、かつて彼らが小領主であったときと同じ尊敬をもって遇されている。侯爵は、城に付属している古い日本家屋の邸に英国風の調度を整えていた。私たちが迎えられたのはその邸であった。3日間私たちは侯爵とその家族の人たちと一緒に、近く絵のように美しい風景を訪ね、また彼らの非常に心のこもったもてなしを受けたのである。

バッソンピエール『ベルギー大使が見た戦前日本』



▲再刊本(2016)と  
▲原著(1945)

——席上、在京外交団の主席バッソンピエールベルギー大使は立って、ホルマン翁の今度の破格の叙勲は翁の光栄は申す迄もないことながら、在留外国人の等しく名誉とするところであると述べて、盃を挙げて我が天皇皇后両陛下の万歳を祝した。この時庭に控えていた戸山学校の軍楽隊は唢吶と「君が代」を奏した。「君が代」が終ると私は立って、ホルマン翁の如き大芸術家を生んだオランダのウィルヘルミナ女王陛下のために乾盃したいと述べて盃を挙げた。一同これに和すと、同時に軍楽隊はオランダの国歌を奏した。

徳川頼貞『善庭楽話』より

頼貞邸におけるチェロ奏者ホルマン歓送会（1923年）



◀和歌山城天守閣を訪れたバッソンピエール一家と頼貞夫妻

▼麹町のベルギー大使館（ジョサイア・コンドル設計）戦災で焼失した。



## ベルギー大使館の午餐

バッソンピエールは世界の優れた演奏家が来日するのを楽しみにしたばかりでなく、多くを大使館に招き個人的に接遇した。1928年、イタリア音楽界の重鎮サン・マルティーノ伯爵を滞在先の頼貞邸に訪ねてプッチーニ《蝶々夫人》の旋律の由来を訊ね、31年初来日のシゲティが演奏会場で遭遇した大地震の恐怖を彼に語ったことなどとともに、ひとつの午餐の思い出を書き残している。

——1937年6月3日、晴れやかな日の中で、私たちの大使館では驚くべき組み合わせの人々が昼食を共にした。フランスのピアニストジル・マルシェ、ウィーンのピアニストヴァインガルテンとその夫人、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の著名な指揮者ヴァインガルトナーとその夫人、フィラデルフィア管弦楽団のこれまた有名な団長の細君ストコフスカ夫人、それに日本のピアニスト井上園子という顔合わせである。



# 夏のアカデミー4つの講演 ——和歌山県公館のサロンにて——

篠田大基

連日の猛暑となった2022年7月2、3日、和歌山県公館で、南葵音楽文庫アカデミーが開催された。筆者にとっては2年半ぶりの来和で、その間に様変わりした県立図書館の南葵音楽文庫閲覧室や、資料整理が大きく進んだ貴重書庫を見て驚くことばかりだったが、2日間で聴講した4つの講演からも、南葵音楽文庫にまつわる研究の進展、領野の広がりや展望を見て取れて、充実した時間を過ごすことができた。



**7月2日(土)** 近藤秀樹氏の「徳川侯爵交遊録～大音楽家と出会った日本人 ヴァンサン・ダンディ」は、徳川頼貞が1921年にパリで当時70歳のダンディと面会したエピソードを起点に、この時期がダンディにとって創作の転換期であったことを解説する内容であった。ダンディは妥協を許さぬ理想主義者として知られるが、ダンディの後妻リーヌから頼貞に贈られた最晩年のダンディの肖像写真(南葵音楽文庫関連資料)は、くつろいだ格好と表情で、一般的なダンディのイメージとは全く異なっていた。頼貞はダンディと面会した後、彼の新作の楽譜を購入したこともあっただろう。その音楽をどう思ったのか、と想像してみるのも楽しい。

泉健氏の「H. ベッセラー『音楽聴の根本問題』(1925) —南葵音楽文庫所蔵の音楽雑誌より—」では、フリーレンダー文庫に収められている雑誌 *Jahrbuch der Musikbibliothek Peters* 所収の上記論文の内容が紹介された。ベッセラーはハイデガーの影響を受け、音楽を美的対象として傾聴するという近代的な接し方とは別の、より根源的な接し方——ともに祈る、ともに踊る、ともに歌う、といった生活に密着した音楽との接し方——の意義を見直そうとする。ベッセラーの主張は、生活改良運動のような

当時のドイツの社会状況と強く結びついているのだが、ではこの論文を日本の南葵音楽図書館



の研究者たちが読んだとすれば、彼らは何を考えただろうか。フリーレンダー文庫設置(1927年)以後に南葵音楽図書館が刊行したいくつかの研究書には、西洋近代の音楽とは異なる東洋の、伝統音楽への関心が、明確に窺われる。

**7月3日(日)** 佐々木勉氏の「カミングス文庫研究のこれから… 写本資料と透かしの研究」では、写本に使われた紙の透かしから成立年代や成立地を推定する研究手法が、「アオスタ写本」の研究事例を交えて紹介され、過日コロラド大学のロバート・シェイ教授からの問い合わせに応じて、カミングス文庫収蔵のパーセルのオペラ《ディドとエネアス》の筆写譜の透かし写真を提供したことが報告された。この資料に関しては『南葵文華』第6号においても、パーセル協会の新版楽譜校訂出版のために和歌山県立図書館が全ページの高精細画像を提供したことが報告されていた。この筆写譜はこの作品の現存最古のスコアとされ、世界から注目を集める南葵音楽文庫の最重要資料の一つである。シェイ教授の透かし研究から、資料の成立年代が修正される可能性はあるかどうか、注視していきたい。



芹野与幸氏の「音楽を通じて徳川頼貞の友人となった建築家 W. M. ヴォーリズ」は、前日の近藤氏の講演と同じく、頼貞の人物交流をテーマとしていたが、近藤氏が頼貞の視点からダンディとの交遊を描出したのに対して、芹野氏は南葵楽堂を設計したヴォーリズの視点で捉えた頼貞を扱った点で好対をなしていた。頼貞とヴォーリズは、音楽という共通言語によって友好を深め、互いに共感し合える間柄だったからこそ、ヴォーリズは頼貞の理想を南葵楽堂という建築で具現化でき、頼貞は完成した南葵楽堂の建築からヴォーリズの意図を理解できたことだろう。南葵楽堂の前で撮影された正装のヴォーリズの表情は誇らしげに見え、印象的であった。この建築が彼にとって満足のゆく仕事であり、これ以後のヴォーリズ建築事務所の飛躍を物語っているようでもあった。

(写真は佐本守)





# 南葵音楽文庫アカデミー 秋のお知らせ

11月の南葵音楽文庫アカデミーは、令和4年度「きのくに文化月間」と連携して開催されます。  
会場はすべて和歌山県立図書館（本館）内です。



19日(土) 11:00~11:30

ミニレクチャー 2階 講義・研修室

林淑姫 「和歌山の音楽家たち [戦前編]」

13:30~15:30

講演と報告 2階 講義・研修室

「和歌山が伝える<南葵の記憶>」第2回

・瑞樹弘芳「徳川家と長保寺:頼倫、頼貞を中心に」

・美山良夫「徳川邸にかかわる資料をもとめて」

(画像と地図、図面を中心に)

20日(日) 11:00~11:30

ミニレクチャー 2階 講義・研修室

美山良夫 「「赤貧、洗うがごとし」

—池永孟と徳川頼貞」

13:30~15:00

重要資料報告会 2階 講義・研修室

報告者: 林淑姫、佐々木勉、篠田大基、美山良夫

※内容詳細は下欄をご覧ください。

15:30~16:50

南葵音楽文庫ミニコンサート 2階 メディア・アート・ホール

(開場 15:00)

「徳川頼貞 初々しい体験を胸に」 司会・お話: 近藤秀樹

曲目: ベートーヴェン、モーツァルト、パーセル、プロコフィエフなど

頼貞や南葵音楽文庫の形成にちなむ音楽

演奏: 和歌山の若い才能 (中学生から大学生)

と南葵音楽文庫サポーター有志

主催: 南葵音楽文庫サポーター有志

共催: 和歌山県立図書館

協賛: 和歌山南ロータリー・クラブ

後援: 和歌山市、和歌山市教育委員会

※曲目など一部変更が生じる場合があります。



▲徳川頼貞邸本館正面玄関  
(「新住宅譜」1919より)

◀池長孟 (1891-1955)



<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/academy/>

受付開始 10月19日(水) 先着順

詳細は10月12日頃から配布、また当館WEBに掲載する詳細案内をご覧ください。

\*催しは全て無料です。

\*個人的な録音・録画はお断りいたします。

\*ミニレクチャーは事前申し込み不要です。  
(入り口で所定の用紙に記入願います。)



昨年の様子▶

## 私家版『蒼庭楽話』 新たに見つかる

頼貞の『蒼庭楽話』(春陽堂書店/1943年/1500部)には、削除や改変前の形をとどめた私家版(1941年/50部)があり、頼貞から親しい友に贈られた。小松耕輔旧蔵本(東京文化会館音楽資料室)は、公共図書館としては唯一の所蔵であり、中央公論新社から復刊された『蒼庭楽話』の底本ともなった。

今般、東京藝術大学音楽学部大学史料室の「上野ひさ氏関連資料」のなかに、『蒼庭楽話』(私家版)が含まれていることを、国立国会図書館の工藤哲朗氏が発見、実見されたうえで、その報告を本年5月22日、科学技術振興機構が提供するresearchmapに掲載している。

氏の報告によれば、この『蒼庭楽話』は、ヴァイオリン奏者であった上野ひさの夫君で美学・美術史学者であった上野直昭に、頼貞が贈呈したものであるという。同本の遊び紙には「呈上野直昭君 頼貞 皇紀二千六百〇二年 紀元佳節の日」という書き込みがあり、この日付は小松耕輔旧蔵本と同じである。なお、限定版50部の番号では、小松本が十二番、上野本は十八番である。

工藤氏の報告では、上野本には質素な外箱があり、そこには「蒼庭楽話 徳川頼貞」と印刷された紙が貼付されているとある。小松本は、本体だけであったので、これは新たな知見である。

詳細はresearchmapを参照していただくとして、これで小松耕輔旧蔵本、東京および和歌山の個人蔵本に加え、確認された私家版はあわせて4冊となった。



▲W. A. モーツァルト作品全集 第1巻  
1798年

## 所蔵資料の広がりを紹介 重要資料報告会 11月20日(日)開催

『蔵書目録(貴重資料)』刊行から半世紀を経た現在、南葵音楽文庫は音楽史研究のための貴重な資料群であるばかりでなく、関心の幅の広がり、音楽図書館としての先見性、日本近代音楽における徳川頼貞の活動

との関係などからみても貴重な資料を含んでいることが判明した。

そのため、予めおおまかな「ガイドライン」を設定、研究員の調査をもとに毎年<重要資料>を選定して、発表している。今年度は、以下の資料をあらたに選定した<重要資料>として報告、またすでに「貴重資料」であるにもかかわらず等閑視されてきた事例も紹介する。

◎W. A. モーツァルト作品全集(第1部門、全17巻、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社、1798-1806年) 有名な音楽出版社がモーツァルトの妻コンスタンツェの協力のもと、作曲家の死後6年を経て刊行した史上初の「モーツァルト全集」。

◎田中正平『純正律の研究』1890年 南葵音楽事業部の評議員も務めた音響学者田中正平(1862-1945)の著書。1890(明治23)年にライプツィヒで刊行。「純正調オルガン」の理論的基礎を形成する。(ドイツ語)。

◎クレメント・ウォーカー『1640年に始まった議会についての歴史的、政治的考察』1648年 カミングス文庫に含まれる一冊。クロムウェルの自署とされる書き込みがみられる。

◎徳川頼貞『指揮者ヘンリー・ウッドに関して』(自筆原稿) 親交のあった英国の大指揮者について、執筆の背景もさぐる。

南葵文華第7号

令和4年10月21日発行

発行所

和歌山県立図書館

〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集

合同会社芸術資源研究所

〒640-8137 和歌山市吹上1-1-22 502号室

編集協力

有限会社ティアンドティ・デザインラボ

〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36